

魚住先生との30余年

小池和彦

青山学院大学社会情報学部

このような題をつけても、魚住先生と特に深く交際をしたわけではなく、先生との間は「君子の交わりは淡きこと水の如し」であり、特に印象に残ることはあまりない。そこで魚住先生について、小池の勝手に思っている印象を、失礼かもしれないが、正直に2、3述べさせていただくことにする。魚住先生は、篤実の人であって、「中国の聖人」という印象をもっている。またこれは必ずしも褒め言葉ではないが、先生は人の話をききすぎるくらい、丁寧聞く方である。一つ強く印象に残っているのは、昔、もう十数年前だが、数学教室がまだ卒業生も持っていないとき、理工学部の中で機械学科のT先生などに、「もっと学生に分かる数学を教えろ」、「お前たちはちゃんと教えてないじゃないか」等でいじめられたことがあった。その時数学教室の意見を聞いて、よし俺がT先生と掛け合ってやるとおっしゃられて出かけられたまでは良かったが、ほんの小一時間もすると、「向こうの言うのももっともだ。お前たちがよくない。」という結論で帰ってこられたのに、数学教室一同で啞然とした思い出がある。また上記の「中国の聖人」の意味は、三国志の劉備玄德、あるいは西遊記の三蔵法師のように、実務においては多才でない面もあるが（失礼）、「魚住先生が困った、困った」といっていると、他の人が「あの魚住先生が困っているのならばなんとか助けねばならない」と思うほど人徳と誠実さを兼ね備えており、また魚住先生も漢の高祖ではないが、「良く将に将たる才能」をもって、ご自分を謙虚なところにおいて他人を使いこなされたという意味である。

実際、今、活躍されている先生方は、社会情報学部長の稲積先生、理工学部の林副学長等、魚住先生が学部長のとき、脇で支えた先生方である。

これは中々出来ないことで、ふつうは政治家タイプの人間だと、自分を追い落とすものとして才能ある人間を警戒し、遠ざけるのか、あるいは嫉妬するのが習性であるが、魚住先生はまったくそんなことは御考えにならないらしく、「あー、問題を解決していただいて、ほんとに助かった。」と無邪気に心から感謝されるのである。あるいは、あまり首尾よくいかなかった場合でも、「あの魚住先生がされたことだから、仕方がない」と他人が納得してしまうのである。これが魚住先生の一番の人徳であり、青山学院の発展のために先生の才能が大いに生かされたところだと思う。以上、失礼なところは多々あると思いますが、小池の感じていることを述べてみました。まだまだ先生、お元気なので、ぜひ学校にいらしてください。失礼の段、多々ご容赦を。